

AoitOri

Communauté Japonaise | Japanse Gemeenschap

砂と炎の落とし子、古代のガラスを蘇らせる

2021
7月号

特集インタビュー

Daniele Renis

歴史ガラス研究家
ダニエル・レニス

A man with a beard, wearing a red tunic and a light-colored hood, is smiling and holding a historical glass vessel. The vessel is ornate, with a flared rim and a base decorated with intricate glasswork. He is standing outdoors in front of a green hedge.

Le verre historique



Le verre historique

歴史ガラス研究家 ダニエル・レニス

Daniele Renis

砂と炎の落とし子、古代のガラスを蘇らせる

古代から中世の歴史的なガラスを研究し、
当時の材料、道具、製法を忠実に守りながら
複製作品を制作しているル・ヴェール・ヒストリック。
その代表を務めるダニエル・レニス氏に、
時空を超える試みのなかで学んだことについて語ってもらった。



Eva Bartova

歴史的なガラスを復刻するプロジェクトの創始者
エヴァ・バルトーヴァさん

La coupe de chevalier XVe

「騎士の杯」クマの顔がモチーフ。

熊の顔がついたグラスには どういう意味がありますか？

中央ヨーロッパにおいて、熊は森で一番強い動物でした。自然界の王といえるでしょう。この杯は王の権威を象徴しています。

15世紀頃、狩りの後の祝宴の席で使われました。複雑な構造ですから、作るのにも大変苦労する貴重なものです。一つの杯に酒を注ぎ、それを皆で回し飲みしたと伝えられます。本物は、現在のケルン、アーヘンなど、ドイツの博物館で見ることができます。

この復刻プロジェクトは どのように生まれましたか？

私の母エヴァ・バルトーヴァが創始者です。彼女はチェコ系イタリア人で、美術史を学んでいたのですが、実習で考古学にも触れる機会があり、その分野の友達がたくさんできました。

しだいに考古学に興味をもった母は、1997年頃、ドイツで中世のガラスを復刻制作している遠い親戚に連

絡をとって、実際に吹きガラスの技術を教えてもらいました。

親戚が作っていたのは、15～17世紀のもので、出土地域もドイツ近隣のものに限定され、お土産として販売されていました。そこで母は、中世のヨーロッパ全域、さらには古代ローマの作品まで幅広く作ったら面白いだろうと考えたようです。

最初は他人が作った作品を各地で仕入れて、中世祭りなどのイベントで販売する活動をしていました。

ところが、しばらくして母は非常に重要なことに気がついたのです。自分が仕入れているガラスの多くが歴史に忠実ではないということに。

例えばワイングラスなど、古代中世には杯の部分が小さかったものを、商品化に際して大きくしたり、ビールのグラスに昔は存在しなかった握り手をつけたり、遺跡から発掘された古いガラスに発想は得ているけれども、現代人の都合に合わせてデザインが改変されていました。

ディズニーランドのような架空の創造物が「歴史」という名前をつけてまかり通っていたわけです。

そこで母は、昔のままの材料と道

具を使って、その時代の製法で作る、特にサイズや形状なども忠実に再現することを目指して自分のプロジェクトを開始しました。

美術史を研究した母のもとには、サンカントネールの美術歴史博物館、フランスのルーヴル美術館などからレプリカの制作依頼が寄せられました。歴史の文脈を理解したうえでガラスの復刻をするところは少なかったのです。

お母様がお書きになった 文章が美しいですね。

「砂と炎の落し子、芸術と歴史を愛する職人の息と手によって生まれた歴史的なガラスは、花瓶、コップ、水差しなどを通じて、時代が培ったガラスの芸術にかかる覆いを少しずつ取り去り、長い世紀に渡る伝統的な技術を蘇らせる…」

古代人にとって砂から透明な物質が生まれることは奇跡でした。容器の中身を見ることができる、透明であるということは、象徴的な意味合いを持っていました。

長い時間をかけて作業してはじめて、 その時代の人々の生き方に触れることができる。

貴族でも普段は陶器や金属の容器を使い、庶民に至っては木製のものを使っていました。透明なガラスは、儀式など限られた機会にしかお目にかかれない特別な存在でした。

古い時代のガラスを再現するなかで、新しい発見もありました。今はガラス製品なんて誰もが持っている、ありふれたものです。

しかし、当時の製法で作るとなると、大変な根気と労力が必要です。ガラスはそれだけ価値があり、神聖なものだったのです。

昔の人がどのように考えていたのか、現代の私たちも想像するようになります。ロールプレイのようなもので、当時の技術を知り、実際に長い時間をかけて作業することを通じてはじめて、その時代の人々の生き方に触れることができると言えます。

具体的にどのような流れで制作するのですか？

まず私が文献や博物館での調査を担当します。例えば 13 世紀フラン

スのガラスを復刻する場合に、最初に確認するのは、それがフランスの北なのか南なのかといった地理的な条件です。地方ごとに入手可能な原材料が異なり、ガラスの色が違うからです。

かつてガラスは贈り物、結婚を祝う品、軍事同盟の証などにも使われていたので、たまに遠い国のものが紛れることはありますが、歴史の文脈や地方ごとの作例を理解していれば、間違えることはありません。

フランスのノルマンディー地方にあるファレーズ城 (1) の作品がいい例でしょう。まず送られてきた写真 (2) を見ながら、当時その場所で入手可能だった原材料や製法について考えます。

砂のなかには不純物も多く含まれます。鉄分が多いと緑が濃くなるなど、化学の知識も必要です。時代の経過によって黄色に変色したところも考慮しなければなりません。

調査の結果から、最初に原材料の配合を決めます。そのためにプラン・ワロン州にいる仲間のエミリー

のガス釜で、色の試作品を作ってもらいます。(3)

形状については、私が鉛筆でデッサンしたものを、イタリアの仲間フランチェスコが 3D のデジタル・モデル (4) に作り上げます。

形が決まったら、最後はドイツにいる叔父のアトリエで制作をします。昔のように木製の型枠を作り、吹きガラスの手法で、熱で柔らかくなったガラスの成形をするのです。(5)

型枠を使っていたというのは、古い時代の図像で分かりますし、15 世紀からは職人がどのように働いていたのか書き残した文献も存在します。

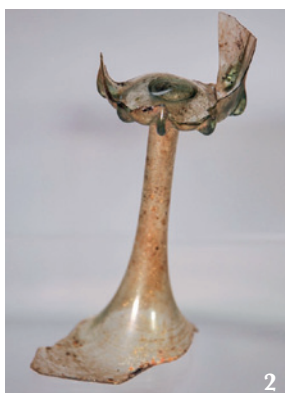
木製なので、熱に耐えられるように一晩水に浸して水分を含ませておきます。それでも 150 回ほどで使い物にならなくなります。(写真下段が型枠を使った制作風景)

歴史を調べて昔のことが分かるのは面白いですね。

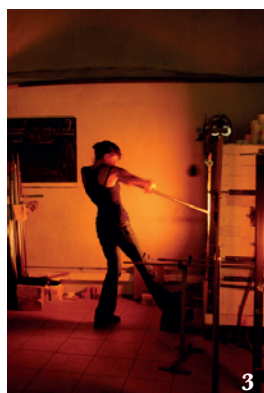
残念ながら、すべてが完全に分かるわけではないのです。



1



2



3



4



5



Verre à tige creuse Falaise XIIIe



Verre à trompes
《Rüsselbecher》
AD 480 - 751



© HBO / Game of Thrones



Verre d'inspiration
《Game of Thrones》



例えば、不思議な形をした杯（上）のモチーフの意味には諸説あります。「涙」という人もいれば、「動物の長い鼻やクチバシ」という人もいます。

6～8世紀のフランク族の墓から出土するので、死者を悼む「涙」という連想は自然でしょう。ただ、動物の鱗のようなギザギザは何を表現しているのでしょうか。その答えは謎のままです。

フランク族は古代ローマ帝国から権力を奪ったゲルマン系の民族です。東から西に移動してキリスト教に接し改宗しました。一族の王クロヴィスは、現在のベルギーのトゥルネーで生まれた人物で、後のフランス王家の始祖となる人物ですが、彼もキリスト教の洗礼を受けます。

しかし、人々がすぐに昔からの信仰を捨てたわけではありません。森の神、岩の神、神話の動物など、数世紀に渡って神々の記憶を保ち続けたのです。その証拠が、お墓から見つかる神話や動物をモチーフにした遺品です。

こうした歴史的な背景を知ったうえで、ガラスに盛り込まれた意匠が涙なのか、神話の動物なのか想像するのは楽しいですね。

活動を続けるなかで ご苦労もあるのでは？

コロナ危機でイベントがすべて中止されたのは痛手でした。出店して作品を販売したり、講演の依頼を受ける機会がゼロになりました。

それに博物館もほぼ開店休業の状態、来館者がいないので作品もまったく売れません。

それ以前も大変なことはたくさんありました。常に各地のイベントに出かけて忙しんでいた母が亡くなったのが2012年です。気丈な人でしたが、病気には勝てませんでした。

彼女を失ったことは、私と妹にとって大変辛いことでしたが、ル・ヴェール・ヒストリックの事業を引き継いで歩いて行こうと、すぐに決心しました。

仲の良い二人の友人たちも、それ

ぞれの特技を生かして活動を後押ししてくれています。ファブリスは経理の仕事を、スケンダーはウェブサイトやグラフィック・デザインなどを担当しています。

映画の小道具として 作品提供することも？

中世や十字軍などを舞台にした映画に、時代考証をしてガラス作品を送ることがありますね。

ただ、大人気シリーズの『ゲーム・オブ・スローンズ』のときは例外でした。ドラゴンが空を舞い炎を吐くファンタジー作品なので、物語の中世らしさを踏まえつつ、新しい創作を提供しました。

このガラスは、足の部分は13世紀に特有のかたち、飾りのついたカップの部分は完全に15世紀のもの。普段はこのようなミックスはしませんが、作品の美術になじむようにデザインしました。ファンを見ると、とても喜んでくれます。

また、ポール・バーホーベン監督の新作『ベネデッタ』には、面白い裏話があります。私は2019年に連絡を受けて、「15世紀イタリアの修道院が舞台」ということで、作中に登場するすべてのガラス作品を提供しました。



2020年にコロナで撮影が中断してしまったとき、ふと興味をもった私は、モデルになった話について調べてみました。すると実話は17世紀に起こったことであると分かったのです。

慌てて小道具の責任者に電話したところ、映画制作の関係者の勘違いで、すでに衣装など15世紀のものを用意してしまったとのこと。

ガラスの歴史のなかで200年の差は大きく、17世紀ならクリスタル・ガラスも登場していた時代です。

最終的に制作チームの判断で、15世紀の雰囲気で撮影すると決定されました。映画は2021年7月初旬にカンヌで初公開されます。修道院の尼僧ベネデッタの同性愛スキャンダルを描いた作品です。

予告篇に一瞬うちのガラスが映っていたのを見て、とても嬉しく思いました。経緯はともかく映画を見るのが楽しみです。

日本人の読者に メッセージをお願いします。

日本は大好きな国です。友人と一緒に旅行したこともあります。最後に私のお気に入りの小説『宮本武蔵』についてお話したいと思います。

剣術の極意を学ぶため訪ねた道場で、武蔵はお茶を出されました。ふと目をやると急須の形が非常によくできている。そこで彼は非常に動揺するのです。



この急須を作った職人は、さぞかし長い年月をかけて苦勞の末に正確な技術を習得したのだろう。愛情を惜しみなく注ぎ込まなければ、これほど美しい急須は生まれない。

剣の道に生きる武芸者が、極意は攻撃のみにあらず、細心の注意と根気こそが大切なのだと悟る場面。

この武蔵の話は私は生前の母に読み聞かせました。母は私は何を言いたいのか、すぐに理解してくれました。いい思い出です。

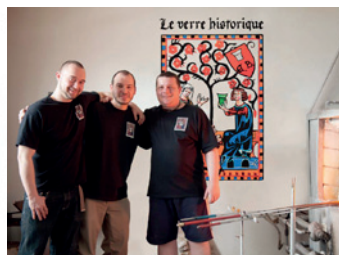
9月にブリュッセルのフォレ地区で中世祭りが開催されるので、ぜひお越しください。コロナで長い間イベントが中止されていましたが、実際にお会いして話をするのが楽しいですよ。昔のガラスについて皆さんと存分に語り合いたいと思います。

Editor's Note

ル・ヴェール・ヒストリックの作品は、丁寧な時代考証と手作りの繊細さが特徴的だ。千年以上も昔の人々が、この杯で愛や友情を育んだと思うと感慨深い。気に入ったものがあれば、ぜひお買い求めいただきたい。棚に飾っても美しいし、大切な友達を招待したときなどに取り出して、実際に使うのも楽しい。家族や友人と分かち合う思い出も詰まった「家宝」になること間違いなし。そして、歴史と文化の灯火を受け継ぐ彼らの活動を支援することにもなる。中世祭りの展示スタンドで応対してくれるダニエルさんと友人たちは非常に優しい人ばかりで、不思議なガラスの来歴を丁寧に説明してくれる。ぜひお気軽に「AOITORIを読んだよ」と話しかけてください。中世のレシピで作ったワインの試飲もしているので、そちらもお試しあれ。



Le verre historique



CONTACT INFO

Le verre historique asbl

Avenue Jeanne 19A, 1050 Bruxelles
tel. +32 474 22 39 64
leverrehistorique@gmail.com

Website

<https://leverrehistorique.be/>



情熱、忍耐、技能、そして謙虚な心 ——

遠い昔を敬いながら、
分量を決め、材料を使いこなし、
古代の製法を蘇らせるには、
そのすべてが求められる。

エヴァ・バルトーヴァ



Verre à tige avec fil cobalt
XIII - XIVe